
東方精流記

相良 秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方精流記

【Nコード】

N5797J

【作者名】

相良 秀

【あらすじ】

いつもどおりにすごしていた人間が幻想入りして、幻想郷で暮らすお話。好奇心旺盛な彼は何をするのか

第1話（前書き）

初めての執筆&投稿です。

色々と指摘してくれると有難いです

第1話

「うう……此処は……？」

目は覚めたはずなのだが……

此処は何処だろうか……

周りは闇

何も見えない

存在するのは自分だけ

何故自分がこんなことに……と思いながらもこうなるまでの行動を思い出してみる。

「確か……」

キーンコーンカーンコーン

？「ふいふ、今日も無事終了したあふ」

と、俺、流　樹良は机に突っ伏した。

樹「さふて、帰ってゲームだふ」

急に復活して5秒で支度して、嬉々として教室を出て行く。

ふ帰り道ふ

樹「ふふ」

テンション高めに歩いていると、ふと横目に何かが見えたような気がした。

樹「ふふ」

気になって見てみると、まだ日が出ているのにかなり暗い横道があった。

樹「あれ？　こんな道あったけな？」

気になる

ものっそ気になる

よし、これは行くしかない!!

樹「レッツゴー♪」

そうして俺は横道に足を踏み入れ・・・

落っこちた♪

樹「おおおおお・・・」

で、今に到るわけか……」

………つて、あれ？

自業自得じゃね？

樹「まあ、良いか。気にしても仕方ないし。しかし、本当に此処は何処なんだ？」

足場はある。踏んだかんじ草でも生えているようだ。
にしても……

樹「なんにも見えねえ」。――

本当に真っ暗だ。

どうしようか悩んでると、

？「あなたは、食べて良い人類？」

ゾクッ?!?!?

いきなり後ろから話し掛けられた。

妙な悪寒とともになぜだか嫌な汗が止まらない。

本能が危険だと叫んでいる!!

……ような気がする。

取り敢えず何か反応しなければ、

樹「む、人間は食べちゃいけないと思うな。それに俺を食べても美味しくないと思うぞ？てか、君は誰だ？そして此処は何処で、何で真っ暗かわかるか？」

よし、これが正解だと思う。

しかし少女は

？「えー、人間美味しくよ？だから貴方も美味しい」

と、のたまった

な……美味しいだど！？

既に捕食済みか！！

食人種だったのか!!

なんてカニバル!?

なんとかして食べられるのだけは回避しなければ…

ル「私はルーミア。場所はわからない。暗いのは私の能力なのだ」

ふむ、場所はわからないのか……どうしたもんか

ってまて、能力ってなんだ?

樹「なあ、能力ってなんだ?」

ル「能力は能力。私は闇を操る程度の能力。そろそろ、お腹空いたから食べて良い?」

……闇を操る程度の能力で……って食われる!?

どうにかして逃げなければ…取り敢えず時間を稼いで…

樹「待て待て待て」

考えてるうちに少女は直ぐ傍まで来ていた

樹「こんなに体格差があるのにどうやって食べるんだ？」

よし、これで少しは

ル「え？こんなふうに？いただきます♪」

稼げなかった、てか言葉選択ミスった

うなだれる俺に口を大きく開けて迫ってくる少女

やばい

食われる

喰われる

来るな

来るな来るな来るな

クルナ！！

ガンツッ！！

響きわたるガラスを打ったような音

ル「いたっ…」

樹「え？」

痛がるルーミアと

惚ける俺

いち早く復活したルーミアが再度俺に近づこうとするが見えない壁に阻まれているようで、

ル「なんで？近付けない……」

取り敢えずは……助かったのか？

見えない壁と奮闘している少女を見ながら俺は逃げようと考えを巡らせるが、

樹「う…あ…」

さきの恐怖のせいかな身体がいうことをきかない。

やばい

この、よくわからない壁がいつまでもつかわからないし、早く逃げなければ！！

しかし、動く兆しは未だ見えず、焦燥感だけが募ってゆく。

くっ、動け！！

ル「なにこれ、意外に硬いなく。じゃあこれを使うか」

と、少女は何かカードみたいのを取りだす。

なんかわからないが嫌な予感がある。

やばい

やばい

？「そこまでよ！！」

ふいに響き渡る凜とした声とともに目の前に赤白の巫女みたいな少女が現れた。

ああ、今度こそ本当に助かった……

何故だかそう思った

そう思った瞬間、一気に身体力が抜けていき、

俺は意識を手放した

第1話（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想お待ちしております

第2話（前書き）

一気に2話投稿です。

結構難しいな

第2話

樹「うう……此処は…？」

なんか前にも同じ事を言ったような……

気にしても仕方がないので、取り敢えず場所の確認をする

ふむ、和室……かな？

家の事なんて全くわからんが畳とか障子とかあれば和室で良いと思う……多分

そして、自分が布団に入っていることに気が付いた

樹「布団に寝てたのか……誰かが……多分あの巫女っぽいのかな？」

巫「気が付いたのね。ぽいじゃなくて正真正銘巫女よ。見ればわかるでしょ？」

樹「うひゃあ!?!?!?!い、いつの間に?」

びっくりした。

いや……だってねえ……いきなり真後ろから声かけてくるんだもん

後、見てもわかんないと思う、

脇の無い巫女服なんて初めて見たし

巫「今来たところよ。……見たところ大丈夫そうね。」

俺をまじまじと見ながら言った。

心配してくれたのかな?

樹「ありがとうな。全くと言って良いほど問題無いぞ?」

先にお礼を言ってから状態を報告する

巫「そう……ならいいわ。……そうそう、御飯つくったから居間に来てちょうだい。その時に色々聞くから。」

そういえばさっきから良い匂いがする。

樹「わかった。何から何までありがとうな」

俺はお礼を言いながら笑いかける。

巫「べ、別にいいわよ!!」

若干頬を染めていそいそと出で行く……が急に振り向き、

巫「あ……そういえば、森で鞆っぱいの拾ったからそこに置いといたわよ。多分貴方なのでしょう?」

と、言いながら部屋の隅の方に指を差す

彼女が指を差したほうを見てみると俺の鞆があった。

樹「ああ、俺のだ。ありがとう。先に中身を確認してからでも良いか？」

巫「いいわよ。先に行ってるから、なるべく早くきてね。」

と、言いながら巫女は居間の方向？に歩いて行った

樹「さてさて、中身はどうなってるかなあ」

鞆をとり、早速中身を確認する。

なんかなくなってたらしョックだな。

樹「よし、これで全部か」

（鞆の中身）

教科書×2

ノート×3

筆箱

ルーズリーフ（42枚）

携帯電話

PSP（電池切れ）

財布

トランプ

アメ（20個入り）×3

その他菓子数点

謎の分厚い本

以上だ

樹「ふむ…………減るところかなんか増えてるし…………」

こんな本見た事ないな…………タイトルも無いし

まあいい、確認終わったしさっさと居間に行くか

樹「腹も減ったしな…………」

そう呟きながら部屋を出る…………

そういや居間の場所知らねえ…………

いや、匂いでわかるか

よし、多分此処が居間だな。

良い匂いがしてるしな。

障子を開けて中に入ると、

巫「遅い!!!」

怒られた……

樹「ごめん」

どうやら食べないで待っていてくれたようだ。

巫「良いからさっさと座る」

と卓袱台を挟んで向かいに敷かれた座布団をさす。

樹「失礼します」

指された座布団に座り料理を確認してみる。

（料理）

焼き魚（なんの魚だろう…）

沢庵

味噌汁

御飯

以上

純和食だ。

うん、古き良き日本だな。

巫「さあ、さっさとたべるわよ。貴方の事聞かなきゃいけないし」

樹「うい」

樹・巫「いただきます」

少年・少女食事中

樹「ご馳走様」

かなり美味しかった

味噌汁は薄めだったが……

巫「お粗末さま、お茶入れてくるから少し待ってて」

と、言い茶碗を持って部屋を出ていき、

数分経って湯飲みと急須を持って戻ってきた

巫「どうぞ」

樹「どうも」

湯飲みにお茶を注ぎ差し出してきたので受け取る

自分の分も注ぎ、一口のんでから此方に向き、

巫「さて、聞かせてもらいましょうか」

と、言ってきたので、俺は姿勢を正した。

どうやら話し合いが始まったようだ。

霊「まずは自己紹介からね、私の名前は博麗 霊夢。博麗神社の巫女をやってるわ。霊夢とよんでちょうだい」

霊夢さんか……

樹「俺の名前は、流 樹良。樹良と呼んでくれてかまわない。宜し
くな霊夢」

霊「ええ、宜しく。さて、なんであんな所にいたのか話してくれな
いかしら？」

何処から話そうか……

少年説明中

樹「……………で、今に到るわけです」

ふう、少し疲れたかな。

霊「……………はあ、自業自得ね」

ええ、わかってますとも。

でも、こう、はっきり言われると……

少し落ち込む俺……

霊「まあいいわ。取り敢えず此処の説明するわよ」

説明？

樹「そういえば、此処って何処なんだ？」

こっちに来た時は闇だったし、今は建物の中だし、全然わからん。

霊「此処は幻想郷。現実世界で忘れ去られたモノとかがたどり着く場所よ。たまにそれ以外もくるけど。つまり、貴方が住んでいた場所とは別世界……もとい、異世界ね。」

全然知らない場所だった

異世界……

樹「つまり……帰れないのか？」

まあ、未練はあまり無いし親は………基本放任主義だし大丈夫だろう。

霊「帰れるわよ。」

帰れるのか。

霊「でも、さっきの話を聞くかぎりだと………」

霊夢がじっと、此方を見つめてくる

なんかあるのか？

霊「……………やっぱり。」

なにが、やっぱり？

樹「あの……………何が？」

取り敢えず聞いてみる？

霊「貴方、能力が発現してるわよ。」

……………は？

樹「どういう事だ？」

霊「えーとね、外の人が幻想郷にくるとなにかしら身体に変化が起

きる時があるの」

身体に変化て

樹「変化って？」

気になったのできいてみる。

霊「んゝ、貴方みたいに能力が発現するだけの珍しいわね。よくあるのは妖怪化とかかしら」

妖怪化……つまり人間じゃなくなるかもしれないなかったのか。

怖えゝ

樹「それで能力って？」

そういえばあのカニバリズムも能力とかなんとか言ってたな。

霊「能力は能力よ。貴方は『干渉を操る程度の能力』ね」

干渉？

樹「はあ……なんだそれ？」

霊「えーと、そのまんまの意味よ。干渉を操るの。ルーミアの時は無意識に操って不干渉にして結界みたいのを張ったみたいね。」

そうだったのか。

樹「それって、凄いのか？」

防ぐだけなら微妙だ

霊「そんなのわからないわよ。まずどんな事ができるか私はわからないし。」

樹「じゃあ、なんで俺の能力の名前知ってるんだ？」

霊「ん、能力の名前くらいならわかるのよ」

そういう能力なのかな。

樹「へえ〜。」

霊「能力の事は置いて、さっきの続きなんだけど、貴方を帰す事はできないの」

樹「あれ？でも、さっき帰れるって……」

どういう事だ？

霊「貴方が能力を発現させたからよ。能力持ちを外に出す事は出来ないの。ごめんなさい」

そうだったのか。

まあ、なんか理由があるんだろう。

樹「いや、別に良い」

だが、その場合住む場所はどうすれば良いのだろうか？

樹「あの……住む場所ってどうしたら…」

霊「人里に空いてる家があるわよ……多分」

多分て……

樹「まあ、行ってみればわかるか」

霊「そうね。ただ、人里まで、遠いし道程が危険だから暫くは此処にいて能力の練習とかしてから行くといいわよ」

遠いのか……

ん？危険？

樹「危険ってどういう……？」

霊「人里までの道が殆ど獣道っぽい所で妖怪とかが出るのよ。おかげで参拝客が全くこないのよ」

かなり落ちこむ霊夢

まあ、参拝客がいなきゃ神社として微妙だもんな

それにしても

樹「妖怪かぁ…俺、戦えないし。能力でなんとかなるかな」

死亡フラグだけは避けたいな

霊「それについては大丈夫よ。私が少しくらいなら教えてあげるから」

おお、有難い。

樹「本当か？宜しく頼む。」

俺は右手を差し出す

霊「ええ、宜しく」

と言い、霊夢も右手を差し出し

お互いに握手した

そして、俺の幻想郷での生活が始まった。

第2話（後書き）

感想等をよろしくです

第3話（前書き）

一応戦闘描写

自信はない

第3話

あれから2週間程が経った

能力の使い方はあらかた覚える事が出来た。

一応、おさらいしてみようと思う

能力名『干渉を操る程度の能力』

- ・生き物以外には干渉ができる

- ・干渉したものは操る事ができる（正確には自分の意思を干渉させる）

- ・不干渉は自分にかけたら環境等の影響を受けなくなるだけで、弾幕等は前面の空間等を干渉不可（結界みたいなもの）にしないと防げない

- ・相手の能力に干渉ができ、その際相手の能力が使える。しかもその間相手は能力を使えない。だが、操った能力の反動等を受ける＋操ってる間は自分の能力は使えない。

- ・干渉できるのは同時に5種類（それ以上やろうとしたら気絶した）まで（同じ種類ならいくらでも操れる（頭痛くなるしかなりの集中が必要だが））

・慣れてないモノに干渉する場合は立ち止まる等して集中しなければならぬ

・能力範囲は半径30メートル（広いようで狭いな）

それぐらいかな？

因みにこの世界は弾幕とスペルカードを使った対戦が基本らしい（あくまで基本）

それで、俺も弾幕を出そうとしたのだが…

無理だった（泣）

なので、風に干渉して、風の塊を飛ばしているのだが、制御がかなり大変だった……

うまくいかないと相手に届く前に霧散するし……

挙げ句の果てに威力が微妙という……やめよう、涙が出てきた。

後、空を飛べるようになった。

まだ、制御が出来ていないので危険なんだが。

因みに飛び方は、重力の干渉を無くし、風で身体を運ぶ。

霊夢曰くそのうち自然と干渉や操ったり出来るようになるらしい。

所謂慣れってやつだな。

樹「ふう、これくらいかな？」

と言いながらノートを閉じる。

樹「さて、寝るか」

因みに、此処は目覚めた時にいた和室である。

樹「はあ、明日はテストかあ」

そう、テストである。

なんのテストかというと、1人でも身を守れるか、つまり霊夢と弾幕決闘なのである。

樹「まあ、スペルカードも幾つかつくったし大丈夫かな」

因みにスペルカードとは自分の技を込めたもので、カード宣言を行ってから使用するものだ。

利点は、スペルカードに固定イメージが込められているので直ぐに技が発動出来る事し、体力の消費も少なくてすむ。

欠点は、宣言をしてから使用するので、避けられやすくなる事だ。しかも、一回の勝負で一度しか使えなくなる。

まあ、そんなところか………

じゃ、おやすみなさい

〔朝・博麗神社境内〕

俺は鳥居に寄りかかり霊夢を待っている。

暇なので周りを見てみるがあるのは無駄にでかい賽銭箱と鳥居、下
が見えない階段、他は木

樹「山の頂上辺りにでもたってるのか？」

多分そうだろうと思う。

因みに、霊夢の住居の本殿はもっと奥だ。

それにしても、暖かい

多分春を過ぎたあたりだと思う

葉が黄緑だしな。

さて、そろそろくるかな

霊「お待たせ。じゃあ始めるわよ」

遂に始めるのか、かなり緊張するな

樹「……………」

霊「ルールはどちらかが降参又は気絶するまで、スペルカードの制限はなし、準備はいいかしら？」

樹「おう！」

よし、頑張るぞ

霊「では……………始め!!」

霊夢の合図とともに大量の風の塊（以後風弾）を放つ

しかし霊夢はそれをひらりひらりと華麗に無駄なくよけていく。

霊「ふりん、だいぶ良くなったわね」

ひらひらとよけながら鍛練の成果を分析していく霊夢

やっぱり当てるのは無理か……

じゃあ、一枚目のスペルカード行きますか

樹「風符『怒り狂う龍の尻尾』」

宣言とともに目の前に竜巻が発生する。

更に竜巻は地面を削りながら霊夢に迫ってゆく

樹「どうだ!？」

霊「ふうん、以外と凄くない。」

お褒めの言葉を頂いた。

さて、霊夢はどうするのかな？

霊「けど、まだまだ甘いわね」

霊夢が懷からスペルカードを出して宣言した

霊「霊符『夢想封印』」

霊夢から複数の光弾が放たれ竜巻に直撃………竜巻を消し去り残った光弾が迫ってくる。

樹「うそっ!？」

あわててスペルカードをだし、宣言する

樹「結界『干渉の拒絶』」

目の前に透明な壁ができ、光弾を全て防いだ

樹「ふう、危なかった……」

まさか、消し去った挙げ句そのまま貫通してくるとは……

霊「あら、防げたの。意外にやるわね。でも休んでる暇は無いわよ」

その言葉とともに座布団みたいなのが数枚とんできたのであわてて避ける

樹「うわっ、危な……」

やっぱり、生半可な技じゃ、無理だな。

風弾で牽制しながら考えを巡らす。

うん、やっぱりあのスペルカードを使うか

樹「……………次で決める」

スペルカードを取り出す

霊「やれるもんならやってみなさい」

余裕の表情で返答をする霊夢

樹「いくぞ……………時符『時空断層―クロノブレイク―』」

霊「……………な!？」

宣言した瞬間、霊夢の周りの空間が歪みだし悲鳴をあげる。

キキキキキキキ

パリンッ

ドッゴーン！！！！

何かが割れるような音がし、ものすごい爆発が起きた。

爆発の余波がくるが干渉の壁で防ぐ

樹「……流石にこれで「殺す気かあゝゝ！！！」」げふう……」

霊夢の怒鳴り声と共に背中に衝撃が走り吹き飛ばされる

霊「まったく、危ないじゃない」

……服をはたきながら怒って睨み付けてくる霊夢

樹「痛たた……って無傷ですか」

起き上がって霊夢の方を見るが服すら汚れてない

霊「当然よ。あんなの当たったら痛いじゃない」

確かに……

だがこれで万策は尽きた。あれを避けられちゃ、これ以上やっても無駄だろう

樹「降参です」

両手をあげて霊夢の方に歩いていきながら言う。

霊「そう……。私に勝とうなんて百年早いのよ」

なんだか嬉しそうな霊夢

樹「そういえばなんであの時前にいたはずなのにいきなり後ろからあらわれたんだ？」

うん、あれにはびっくりした

霊「あれは^{あくうけつ}亜空穴で技で所謂、瞬間移動よ」

瞬間移動で……………反則だ

樹「勝てる訳がない……」

霊「まあ、気にしても仕方ないわよ」

樹「痛い痛い」

笑いながらバンバンと背中を叩いてくる霊夢

ふと、真面目な顔になり

霊「まあ、これだけでできれば大丈夫ね。合格よ。お疲れ様」

樹「え、あ、有難う」

霊夢のいきなりの変化にしどろもどろになりながらも答える。

霊「さて、戻ってお茶にするわよ」

樹「りょかい」

さて、此処での生活もう終わりかな

と、考えながら、霊夢の後を追いかけていく

第3話（後書き）

スペルカードの説明等は次で書きます。

主人公設定（前書き）

サブタイトルの通りです

気になる所やわからない所、誤字脱字があったらお願いします。

主人公設定

名前 流ながれ 樹良きい

種族 人間

外見 黒髪 茶眼 髪は短め

年齢 17

職業 学生（だったw）

身長 約170cm

能力 干渉を操る程度の能力

運動神経はそれなりに良い。

動体視力はかなり高い。

比較的温厚だが好奇心旺盛で意外に喧嘩っ早い一面もあり、やると

きはやる（かも）

楽しければ万事OK♪

攻撃は風弾を好んで（てかそれしかない）使う

技

風弾

風を固めて打ち出す技

空間転移

今いる場所（空間A）と転移先（空間B）を繋いで入れ換える技。
能力範囲の30m内しか移動できない。

霊夢の亜空穴を見て真似た

空壁

風を固めて作った壁

それなりに固い

『干渉を操る程度の能力』について

- ・心が無いものにならなくても干渉可能
- ・干渉したものは操る事ができる（正確には自分の意思を干渉させる）

- ・不干渉は自分に向けた場合は環境の影響等を防ぐ

- ・相手の能力に干渉し、自分の能力として使う事が可能。その間相手は能力を使えない。だが、操った能力の反動等を受ける＋操ってる間は自分の能力は使えない。

- ・干渉できるのは同時に5種類までだが、同じ種類ならいくらかでも操れる

- ・慣れてないモノに干渉する場合は立ち止まる等して集中しなければならぬ

・能力範囲は半径30メートル

所持スペルカード

風符『怒り狂う龍の尻尾』

直径約3m高さ約25mの竜巻をおこす。

能力で作ったためか周りを吸い込む力は弱い。

中の風速はかなり速く、木は抜ける前に削られて、粉々になる
軽いものならボロボロにして巻き上げる程度

時符『時空断層―クロノブレイク―』

範囲内の時間の流れをめちゃくちゃにし、空間に亀裂をいれて大規模な爆発をおこす。

意外に危険

結界『干渉の拒絶』

空間の一部を干渉不可にし壁にする。所謂空間結界（の出来損ない）

干渉『能力操作―ability puppet―』

相手の能力に干渉し暫くの間自分の能力として使う。

これを使用中は相手は能力を使う事ができない。

操った能力の反動を受ける

結構消耗が激しい

そのうち使うと思う

主人公設定（後書き）

スペカ等新しくでたらこっちを更新するか、新しく作るか迷い中

他のキャラやスペカの説明はありますかね？

第4話 前編（前書き）

携帯で執筆するのって結構大変なんですね。

今回は分けさせてました。

続きはなるべく早く投稿するつもりですが遅くなったらすみません

第4話 前編

霊「はいっ、これでおしまい。」

救急箱をしまいながら言う霊夢

樹良はさきの戦鬪のすり傷等を霊夢に治療してもらっていた

樹「有難う」

霊「じゃあ、お茶入れてくるから」

樹「いつてらっしゃい」

慣れたものである

樹「そういえば此処に来てからもう2週間経ったのか……」

親は元気かなあ……まあ、大丈夫だろ、あの親だし。

樹「そういえば、此処って神社なのに誰一人としてこなかったな」

霊夢は寂しくないのかな？

廊下から足音がする。

どうやら霊夢が戻って来たようだ。

霊「お待たせ。」

お茶うけも持って来たようだ。

樹「いただきます」

霊「どうぞ」

ズズズ

樹・霊「はあゝ」

俺はのんびりしたこの時間が結構好きだ。

外ではこんな時間なかったしな

と、のんびりしていると

バキバキバキ

グシャツ

樹「なんだ？」

霊夢に聞いてみる

霊「さあ？」

樹「木の折れた音と……後、なんだろう？」

結構嫌な音だった気がする

霊「多分人が落ちた音ね」

樹「人が落ちた？」

などと話していると

バンッ！！

凄い勢いで障子が開けられ、

？「霊夢く！！遊びにきたぜ☆」

と、言いながら葉っぱを撒き散らし、声の主が入ってくる

………きつと魔法使いだ。黒いし、トンガリ帽子だし、箒持っているし。

霊「魔理沙、部屋を汚さないでくれる？」

霊夢は一瞥し、そう言っただけでまた、お茶を飲む

どうやら魔法使いは魔理沙というらしい。

魔「いや、すっ飛ばしてきたら止まれなかったん……だ………ぜ？」

どうやらさっきのは魔理沙だったらしい

と考えてたら不意に魔理沙と目が合った。

樹「……………」

魔「……………」

霊「…………ズズ」

カラン

魔理沙の手から箒が落ちる

魔「…………れ」

れ？

魔「霊夢が遂に男を作った〜！！！！」

霊「ぶう〜！！」

樹「あちゃっ！！熱い！！」

霊夢の吹き出したお茶が俺にふりかかる。

霊「げほっ!! げほっ!! ……そんなわけ無いでしょうが!!」

霊夢がむせながら怒鳴るが魔理沙は既に箒にまたがって

魔「赤飯借りてくるぜ☆」

と言い遙か彼方に飛んで行った。

……借りてくるのか？

霊「はぁ、全く」

霊夢は落ち着いたのか、座り直しお茶を飲み始める

なんだったんだろうか？

霊夢がすでに気にしていなかったのも、俺も気にしないでタオルで
霊夢が吹き出したお茶を拭いている事にした

？「どうも、清く正しい射命丸です」

また、なんか来た

霊「ぶうー！！」

樹「なんの！！」

霊夢が再度吹き出すが俺はそれをタオルで防御する

射「なにやってるんですか？」

射命丸が呆れた様に聞いてくる。

樹「お茶を防いでんの？」

疑問系で返してみる

射「それは、見ればわかる」「なんであんたが此処にいるのよ！！」
…

あやや」

復活した霊夢に怒鳴られ少し落ち込む射命丸だが、直ぐに気を取り直し、

射「よくぞ聞いてくれました！！霊夢さんが男を誑かしたと聞いたので取材に来ました」

ゴンッ

こける霊夢

………誑かすて

霊「なんでそうなるのよ！！」

霊夢は怒鳴っているが文は無視して、手帳とペンを持って此方にやってくる

樹「なんか用か？」

文「初めまして、文々。新聞記者の射命丸 文です。文でかまわないです。取材してもよろしいでしょうか？」

……パパラッチか

樹「初めまして、俺は流 樹良だ。樹良でかまわない。取材ってなんのだ？」

俺なんか取材してもなんもないだろうに

文「いえ、ちょっとした質問みたいなものです。」

質問か……

樹「別に変なのじゃなければ答えるが？」

文「ご協力感謝します。まず最初に何時から此处に？」

ふむ、まともな質問だな。

樹「だいたい2週間くらい前かな？」

文「ふむ、意外と長いですね。」

何が？

文「次に……」

文の取材は主に俺の趣味とか好きなものとかそういうものだった

………はい、有難うございます」

樹「終わりか？」

質問に答えるだけなのに結構疲れたな

文「次で最後です。樹良さんは霊夢さんはどう思ってますか？」

樹「ふむ……」

どう思ってるか……

考えながら霊夢を見してみる

霊夢はまだなんか一人で怒鳴っていた

怒鳴るのに夢中(?)でさっきのやり取りにも全く気付いていない

因みに文はキラキラした顔で此方を見ている

樹「霊夢は優しくて良い奴だと思う。色々助けてくれたし」

文「ふむふむ、そうですか」

文はかなり素早く手帳に書き留めている

霊「ちょっと、射命丸!! 聞してるの?」

霊夢はやっと聞いてない事に気付いたようだ。

それに気付いた文は手帳をしまい

文「それじゃ、樹良さん、取材の御協力有難うございました」

ぺこりとお辞儀をする

霊「取材ってなによ？また、なんか変なの書く気じゃ無いでしょうね？」

霊夢が射命丸を睨み付けなが言う

文「む、変なのって失礼な！！私は幻想郷の真実を（ちよこつと誇張して）皆に伝えているだけです」

なんか聞こえたような気がしたが気にしたら負けなきがする

文「じゃ、これにて失礼します。ではでは」

文はびゅん！！という音と共に消える

霊「ちょっと、待ちなさいよー!!」

文を追いかけて霊夢も出ていく。

遠くのほうで「次回の文々。新聞をお楽しみに」とか「待ちなさ
いー!!」って声が聞こえる

………ズズ

樹「平和だな」

俺は一人呟いた

第4話 前編（後書き）

……文字数少なくてすみません

パソコン欲しいな

第4話 後編（前書き）

お待たせしました

それにしても戦闘描写は難しいな

全然進まないし

もっと頑張ろう

第4話 後編

前回のあらすじ

魔理沙登場

射命丸登場

……平和だ

～居間～

樹「暇だあ～」

只今絶賛ごろごろ中

霊夢が文を追い掛けていつてからかなり経つが未だに帰ってこないのだ。

能力の訓練をして、時間を潰してたのだが疲れたし、もうやる気も起きない

樹「寝るか………」

そう結論を出し夢の世界へ旅立

ゴオッ

ドオオンー!!

てなかった

樹「今度はなんだし……」

音は……確か境内の方から聞こえたはずだ

樹「……行くべきか？」

どうしようか

バンッ

障子が勢いよく開けられる。

どうやら行く必要はなかったようだ

魔「赤飯借りてきたぜ☆」

と言いながら魔理沙が入ってくる。

樹「本当に借りてきたのか？」

魔「当たり前だぜ。ほら」

と、魔理沙は飯櫃を差し出した。

樹「……………」

本当に持ってきてやった…………

魔「どうだ!？」

どうだって……

樹「おー、すごいすごい（棒読み）」

魔「心がこもってないぜ!!」

樹「無理だぜ」

魔「真似すんなよ、えーと？」

そういやまだ自己紹介してなかったな

樹「俺は流 樹良だ。取り敢えず宜しく」

魔「私は霧雨 魔理沙。宜しくな」

魔「あっ、そうだ!!」

魔理沙が楽しそうな笑みを浮かべながら此方に寄ってくる

樹「な、なんだよ」

なんか怖いので若干後退る

てか、逃げる準備を……

が、手を捕まれ

魔「霊夢の男なんだから強くなくちゃな。弾幕勝負だぜ」

意味がわからん

ズルズル

引きずられていく

樹「俺は霊夢の男じゃないってば」

抗議の声を上げるが

魔「そんなの関係無いぜ」

ないのかよ

ただ戦いたいだけだった

魔「さあ、着いたぜ」

いつのまにかついでしまったようだ

仕方ないので諦めよう

ふと周りを見るとボロボロだ

多分境内のはずだが見るも無残な姿だ

樹「なんでこんななってんだ」

思わず呟いた

魔「いやゝ、止まらなくて思わず撃ちまっただぜ」

俺の呟きに罰が悪そうに答える魔理沙

こいつが原因だったのか。

なんか急に逃げたくなってきた。

まあ、元からやるきなんてなかったがな

魔「じゃあ始めるぜ。ルールは降参又は気絶するまで。開始!！」

こっちの返事もなにも聞かずにはじめやがった

開始の宣言後直ぐに星形の弾幕を放ってくる魔理沙

樹「おお、結構綺麗だな」

魔「そういつてくれると有難いぜ。それにしても、避けるだけか？」

そういつて更にレーザーを撃ってくる

樹「おおう、危ないな」

霊夢との特訓がなきゃ避けられなかったな

しかし、未だ大量に迫ってくる星形弾幕

……やるか

樹「風符『怒り狂う龍の尻尾』」

発生させた竜巻は弾幕を飲み込みながら魔理沙に迫っていく

魔「おお、竜巻かゝ、射命丸のとは全然違うんだな」

樹「さあ、どうするよ……って、あゝ!？」

なんと吸い込まれた星形弾幕が空から降ってきた

樹「ひいゝ、結界『干涉の拒絶』」

魔「人の弾幕を使うとは、やるじゃねえか」

魔理沙は箒にまたがり弾幕を避けながらいう

因みに竜巻は分速3mくらいのスピードなのでまだ魔理沙まで届いていない

遅っ

こりゃあ、新しいの考えないといけないな

魔「じゃあ、今度はこっちの番だぜ」

魔理沙はなにか小さな箱みたいなのを構える

魔「恋符『マスタースパーク』」

ゴォ

刹那発射される極太レーザー

ドガアーン

破壊される境内

魔「やべっ、やりすぎたか？」

樹「げほっ、げほっ、危ないなあ」

魔「おお、どうやって避けたんだ？」

危なかった

暇潰しの時に転移の練習をしてなかったら直撃だったな

樹「秘密だ」

取り敢えず教える気は無い

魔「そんな事言うなよ」

手の内をさらす気は無い

ゾクッ

なんだ？

急に悪寒が……………

よしっ、逃げよう

俺は居間まで転移をして逃げた

樹「あつ、最初からこうすりゃ良かったんじゃない」

Side 魔理沙

魔「おお、どうやって避けたんだ？」

まさか私の一撃が避けられると思わなかった

樹「秘密だ」

どうやって避けたのか気になる

なんとしても聞き出さなければ

魔「そんな事言うなよ」

しかし樹良は黙っていて、答えてくれない

どうやって聞き出そうかと考えている時だった

？「まゝりゝさゝ？」

魔「ひい」

突如背後から低めの声がしたので悲鳴をあげてしまった

ゆっくり後ろを振り返ってみると

霊「にこっ」

とっても良い笑顔の巫女さんがおっしゃった

……………よしっ、樹良のせいでしょう

魔「ええと、これは樹良が……」

霊「あら、貴女しかないわよ？」

返された言葉に辺りを見渡してみると誰もいなかった

樹良のやつ逃げたな

霊「それにしてもまた派手にやってくれたわね」

魔「……………」

逃げよう

そうきめて箒に……

無い、箒が無い

霊「明日迄に境内を綺麗にきなさい！！それまで箒は預かっておきます」

いつもっていったんだ霊夢？

魔「……………飯は？」

霊「終わるまで抜き」

魔「そりゃ、ないぜー！！」

恨むぜ樹良

side out

その後

赤飯は樹良と霊夢が美味しくいただきましたw

魔理沙は朝まで修理がかかったとか

樹「ふう、あの時逃げて正解だったな」

さりげに自分が壊した分も修理させた主人公であった

第4話 後編（後書き）

博霊神社編終了かな？

次は人里に向かう……はず？

因みに新聞はいつか番外編で書こうかと

それにしても前編後編分けた意味あったのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5797j/>

東方精流記

2010年10月9日08時23分発行